



黒い影



川崎ゆきお

「日はこんなに長かったですかなあ」

「昼間の時間が長くなったのですよ」

「ああ、そうですなあ。もう春ですから」

老人は歩道を歩いている。久しぶりの散歩だ。

「いや、そうじゃなく、影はこんなに長かったでしょうかなあ」

老人は道脇にある四階建ての下にいる。

「え、影ですか」

影は歩道から車道まで覆い、その向こうの歩道からは日が当たっている。さらにその向こうは二階建ての住宅地が続き、空は雲一つなく、よく晴れている。

「さあ、そんなものでしょ」

「私が冬の初め頃、見た影の長さに近い」

「時間にもよると思いますが」

「いや、私は散歩に出る時間は、決まって朝食後でな、これは嫁が作る。しっかり同じ時間に食べておる。息子がそれを食べ、会社じゃ。子達は学校。しかし、今は春休みのようだな」

「はい」

「こんなに地面が黒かったかなあ」

「だから、影が出来ているのですよ」

「それは分かっておるが、冬場留守にしておったので、繋がりがよう分からん」

「別の場所におられたのですか」

「いや、この散歩コースを留守にしておった」

「はい」

「寒いので、散歩に出られなかった。だから、大留守じゃ。そのため、繋がりが切れたはずなのに、同じなんじゃなあ」

「日が短くなる時期と、日が長くなる時期なので、似ているのでは」

「そうじゃな。しかし、こんなに地面が黒いのは少しおかしいぞ」

「だから、日陰なので」

「いや、闇のように濃い」

「コントラストが強いからでしょう。よく晴れているので、ほら、あちらは非常に明るい。眩しくて、見てられないでしょ」

「そうかなあ、これはただの黒塗りではないのか」

「日陰です」

老人は、その通行人と会話を終え、日陰の歩道を歩いて行く。

そして、四階建てのビルを通り過ぎ、駐車場の横に入った。そこは日を遮る物がないので、歩道には日が当たっている。

老人がそこを歩いているのだが、真っ黒だ。

通行人は、これは光線の加減で、そう見えるのだらうと、気にもとめなかった。

了